⑭　つぎの日には、ごんは山でくりをどっさりひろって、それをかかえて、兵十のうちへ行きました。

語彙的・文法的意味・構造

・次の日には＝「に格」のとりたての形
・に　（格助）〔動作・作用が行われ、また存在する、時間的・空間的な位置や範囲を示すのが本来の用法〕
①時を指定する「五時―起きる」②場所・範囲を指定する。「アパート―住む」③目標・対象などを指定する。「魚釣り―行く」④帰着点や動作の及ぶ方向を表す。「家―たどりつく」⑤動作・作用の起こる原因やきっかけを表す。「山登り―夢中になる」「恐ろしさ―ふるえる」「やぶ蚊―苦しむ」⑥比較・割合の基準を表す。「一か月―二日の休み」「親―似ぬ子」⑦動作・作用の起こるみなもとを表す。「人―ぶたれる」⑧ある資格をもつという意を表す。として。「ごほうび―千円もらう」⑨変化する結果を表す。「学者―なる」⑩動作・状態の行われ方・あり方を表す。「左右―ゆれる」⑪（多く「には」「にも」などの形で）尊敬すべき主語を表すのに用いる。「陛下―は、両三日御休養の御予定であります」⑫（「…には…が」の形で、活用語の終止形に付いて）条件付きの許諾の意を表す。「行く―は行くが、しばらく待ってくれ」⑬（同じ動詞を重ねた間に用いて）程度のはなはだしいことを表し、その動詞の意を強める。「待ち―待ったこの日」⑭動作が行われる手段・方法を表す。で。によって。「この皮衣は火―焼かむに、焼けずはこそまことならめと思ひて竹取」⑮状態を認定するのに用いる。のように。の状態で。「花ぞむかしの香―にほひける/古今（春上）」
・かかえる＝①腕で持つ。胸にだく場合にも脇の下に持つ場合にもいう。②人を雇う　③自分の負担になるものをもつ「家に病人をかかえる」
・述語が三つの文である。一番目の「かかえて」は、行き方を示す修飾語とも考えられるが、「、」があるので、述語とした。

指導の要領・留意点

・次の日には＝前の日にひきつづき、の意だが、次の日にもや、次の日と比較すると、前の日にしたつぐない（思いつきでした）と、次の日にすることの内容のちがうことがはっきりする。
前の日には…をした。
①次の日に…をした。
②次の日にも…をした。→同じ質のことをくりかえす。
③次の日には…をした。→前の日にひきつづきくりかえすのだが、前の日のつぐないが思いつきで、いわし屋のいわしを投げこんだのとはちがい、くりを拾って、それをとどけるというように、内容も質も変わっていることがわかる。
⑭の文は、ごんのしたことが三つ書かれている。
・山で拾って→わざわざ山へ行って、くりを拾う。くりをいっぱい拾う。
・かかえて→ひろったくりを、たくさんだいじに持っていく。
・行きました。→兵十のうちへ出かける。
くりを拾って、かかえて、兵十のうちへ行くということから、ごんの気持ちや姿がわかる。

⑮　裏口からのぞいてみますと、兵十は、昼食を食べかけて、ちゃわんをもったまま、ぼんやりと考えこんでいました。　⑯へんなことには兵十のほっぺたに、かすりきずがついています。

・のぞく
（他動詞）
(1)すき間や穴などからこっそりと見る。「鍵穴から中を―・く」
(2)高い所から下を見る。「谷底を―・く」(3)ちょっと立ち寄る。「古本屋を二、三軒―・く」(4)こっそり見る。また、ちょっと見る。「子供の教科書を―・いてみる」(5)望遠鏡・顕微鏡などで見る。「双眼鏡を―・く」
（自動詞）
(1)一部分がちらりと現れ出る。「雲間から月が―・く」(2)物

・～してみる＝このもくろみ動詞は、動詞の示す動作をためしにおこなうことを表す。（ごんが）のぞいてみた、というのは、ごんがためしにのぞいたとの意。
のぞきました→したことが事実として書かれている。
のぞいてみました　→どうしているかなという気持ちがのぞくという動きの裏にあることがわかる。
・のぞく＝こっそり見る。ごんがこっそり見たのは、兵十がどうしているか見たかったからだ。
⑮の条件の文からは、兵十のようすを気にしているごんのすが

に向かって位置をしめる。のぞむ。

・食べかける＝（接尾）し始める、また、途中までする。今にもしようとする。「本を読みかけて、座を立つ」「溺れー」

・食べかける＝すがたをあらわす合わせ動詞。動詞の第一中止めに、「かける」の形でつづく。「食べ始める」「今にも食べようとする」の意になる。

・まま　（接助）

(1)（完了の助動詞「た」に付き、「…たまま」の形で）上の句によって示される状態が保たれている状況で、次の行動がなされることを表す。ままで。

「机に向かったー、何もしないでぼんやりしていた」

(2)（候文　そうろうぶん）など、手紙文に多く用いられて）事情をあげて理由の説明をするのに用いる。…ので。…によって。ほどに。あいだ。

・（ごんが）裏口からのぞいてみますと

～してみる　動詞の第二中止めに「みると」の形で続き、その時の状況を表す。もくろみ動詞　（既出）

・考えこむ　（既出）

・変なことには…話し手の気持ちをあらわす

たがわかる。いわしを投げこんでやった兵十が、そのことをどう受けとっている書きにしているごんだ。

・⑮の主文は、兵十の動きが描かれている。1，食べかけて　2，持ったまま　3，考えこんでいた、の三つで、1と2は「考えこんでいた」の修飾語にも考えられる。

1，食べかける＝食べ始めるが、途中でやめている

「勉強しかける」「耕しかける」

するつもりでやり始めるが、途中でやめている状態。

2，持ったまま＝持った状態がずっと続いている

「立ったまま」「行ったまま」

ある状態が、そのままつづいていること

茶碗を持ったまま食べる手を止めて考えこんでいる兵十の姿から、何か考えこまなければならないようなことが兵十におこっていたことがわかる。

この文は、ごんの目を通した兵十の姿が描かれている。

・ア、かすりきずが兵十のほっぺたについています。

イ、兵十のほっぺたにかすりきずがついています。

アもイもことがらは同じだが、イのほうは、かすり傷がついている人や場所が強調される。（語順による表現性）

・⑯も、ごんの目を通して、兵十の姿が描かれている。だから、「変なことには」は、ごんの気持ちをあらわす。

考えこんでいる兵十の姿、それにくわえて、ほほにかすり傷をしている兵十のすがたを見て、ごんは、おかしいな、どうしてこんなことになったのだろうと思っている。

・⑬では、ごんはつぐないにいいことをしたと思っているから、⑮や⑯に描かれているような兵十のようすは、ごんには思いがけないものであった。

⑰どうしたんだろうと、ごんが思っていますと、兵十がひとりごとを言いました。

⑱「いったいだれが、いわしなんかをおれの家へほうりこんでいったんだろう。おかげでおれは、ぬす人と思われて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。

・どうしたんだろうと、ごんが思っていますと、

状況語的つきそい文（条件をあらわす）

・いったい＝（副）(1)疑問を強める言葉。相手を責めて問いただす時も使う。ほんとうに。「ーどうする気だ」「ーどこへ行ったのだろう」(2)そもそも。もともと。「ー自分は広義の教育家にならうと思ってゐるのだ/おめでたき人（実篤）」

・おかげ＝幸福や成功の力添えとなる他のもののはたらき。「神仏のーをこうむる」「あなたのーで助かりました」

・ぶつぶつ＝（副）(1)小声でつぶやくさま。「何かー言いながら歩いている」　(2)不平不満などを大っぴらでなく、言うさま。「どう分配しても誰かがー言う」　(3)小さな穴や突起がたくさんあるさま。粒立っているさま。「鶏の皮みたいにー（と）している」(4)小さな泡を出しながら煮立ったり、湧き出たりするさま。「ガスがー（と）吹き出す」(5)何度も突き刺して穴をあけたり、短く切ったりするさま。また、その音を表す語。「蓋にー（と）穴をあける」「綱をー（と）切る」

・⑰の条件の文　ごんが思っている中身に「　」をつける。

どうしたんだろうと、ごんが思ったのは、

①昼飯を食べかけて～ぼんやりと考えこんでいた

②兵十のほっぺたにかすりきずがついていた

からだ。（⑮⑯の文から）

・ごんの頭に描かれていた兵十の姿は、⑬の文からすると、いわしを投げこんでもらって喜んでいる、あるいは、うまそうにいわしを食べている兵十だ。

ごんが見た兵十は、⑮⑯に書かれているとおりだ。予想していた姿と、現実の姿のくいちがいをおさえると、「どうしたんだろう」や「変なことには」の意味がはっきりするだろう。

・「いったい…ほうりこんでいったんだろう。」は、たずねる文だが、「ほうりこんでくれなければいいのに、迷惑なことだ」の意。たずねる文は、「何で弟を泣かすのか」「だれが宿題を教えてやるものか」などのように、反語や相手の態度を責めたりする気持ちをあらわすのにも使われることを教えたい。

⑲ ごんは、これはしまったと思いました。

・しまった＝（感）失敗したときなどに出すことば「ー。傘を忘れてきた。」

・ごんはー思いました。
思ったなかみを「　」でくくらせる。
・兵十の独り言や、ほっぺたのかすり傷を見たごんは、うなぎのつぐないにと思ってやったことが、かえって、兵十に迷惑をかけてしまったことに気づき、「これはしまった」と思ったのだ。

・おかげでー迷惑な時にも使われる。…のせいでの意。
・おれは、ぬす人と思われて、ひどい目に遭わされた。
この文は、受け身の文だ。
ぬす人と思ったのは
ひどいめにあわせたのは ／ いわし屋
ア、いわし屋はおれをぬす人と思って、ひどいめにあわせた。
イ、おれはいわし屋にぬす人と思われて、ひどいめにあさわれた。
アもイもかかれていることがらは同じだけれど、アは、いわし屋の立場、イは、兵十の立場で書かれている。
受け身の文が使われていることから、兵十の気持ちがわかる。
・ぶつぶつ言うー独り言を言っているようす。考えていることが口に出てしまうのは、どんなときかを考えさせると、兵十の思いがわかるだろう。
・⑮⑯に描かれている兵十のすがたを見て、どうしたのだろうと思っていたごんは、兵十のひとりごとを聞いて、その理由がわかった。このとき、ごんがどう思ったのかは、すぐわかるだろう。

⑳ かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷までつけられたのか。21 ごんはこう思いながら、そっと物置の方へまわって、その入口に、くりを置いて帰りました。

・かわいそう＝気の毒で同情せずにはおれないさま。「ーな子ども（境遇）」「いかにもーに見える」
ここでは、ごんの気持ち。
・兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、きずまでつけられたのか
受け身のたちば
←→
・いわし屋は、兵十をぶんなぐって、きずまでつけたのか。
しかけるたちば
・か＝感動を表す助詞（既出）
・まで＝(1)場所や時間などに関して、動作・作用が至り及ぶ限度・到達点を示す。「東京からホノルルー飛行機で行く」　(2)動作・作用の至り及ぶ程度を表す。ほど。「からだがへばって動けなくなるー頑張るつもりだ」　(3)事態の及ぶ範囲がある限界にまで達することを表す。さえ。「子供にー笑われる」
(4)それ以上には及ばず、それに限られる意を表す。…にすぎず

・20と21は、実は、一つの文である。
・ごんのうごきは、四つある。①思いながら　②回って　③置いて　④帰りました、である。
・こう　ー　ごんの思ったなかみで、それは、文⑳である。
・あんなー指すことばであるが、小これは、強めの意味。
・きずまで　つけられたのか。
きずをつけられたのが。
他のこともされたが、その上に、きずもつけられた、という感じで、程度のひどさがわかる。
・⑳は⑲に続いて、ごんが思ったことである。兵十のほっぺたの傷は、いわし屋にぶんなぐられてできたのだということが、ごんに理解できたのだ。自分が、いわしを兵十のうちの中へ投げこんだために、何の罪もない兵十が、きずがつくほどひどく、いわし屋にぶんなぐられてしまったんだなあと驚き、かわいそうにと、兵十に同情しているのである。
・そっとー回ったようすである。悪かったなあ、あんなことになるとは思わなかったなあ…と思いながら、物置の方へ回るごん

ない。だけ。「合格したのは運がよかった―だ」　(5)文末にあって、終助詞的に用いられ、意味を強め確認する気持ちを表す。中世後期以降の用法。「とりあえず御礼の言葉―」

・あんな＝あのような。あれほどの。「わたしも―成績がとりたい」

・そっと＝(1)注意深く静かにするさま。「―なでてみる」　(2)触らないでおくさま。そのままにしておくさま。「この問題は当分―しておく」　(3)こっそりするさま。ひそかに。「裏口から―帰る」　(4)ちょっと。少し。「景清ほどこそあらずとも、―手並を見せんず」浄瑠璃・出世景清

の気落ちしたようすがわかる。

・置いて―いわしのときには、兵十のうちの中に投げこんだのであるが、今度は、まえとはちがう。兵十のために、山からわざわざ拾ってきたくりなので、だいじに置いたのである。兵十にすぐにわかってもらえるように、物置の入り口に置いたのである。

・帰りました―いわしでは、兵十に迷惑をかけてしまったが、くりなら兵十が喜んでくれるにちがいないと期待して帰ったことであろう。

＊この一連の読みには、ちょっと無理があるような気がする。

22　つぎの日も、そのつぎの日もごんは、栗をひろっては、兵十の家へもってきてやりました。

・も…ならべのくっつき
名詞をいくつもならべるときには、名詞のあとに「と」や「や」をつけることがある。「と」「や」のことを、ならべのくっつきという。とりたてのくっつきの「も」を使うことがある。

・は…とりたての「は」

・持ってきてやる…やりもらい動詞。　近づき態
だれかのためにする動作は、やりもらい動詞で表す。やりもらい動詞は、第二中止めに「やる」「もらう」「くれる」のような、たすける動詞をくみあわせて作る。
①だれかのためにする動作「～してやる」
②だれかにしてもらう動作「～してもらう」
③だれかがしてくれる動作「～してくれる」

・次の日も、その次の日も―次の日だけでなく、その次の日も

・拾っては、持ってきてやりました。
拾って、持ってきてやりました。
何回もくりかえしていることがわかる。

・初めてごんが、兵十のうちの物置の入り口にくりを置いて帰った次の日も、ごんは山へ行ってくりを拾い、兵十のうちへ持っていってやり、その次の日もまた、わざわざ山へ行って、拾って持っていってやったのだ。

・持ってきてやりました―ごんの立場からすれば、「持っていってやりました」であるが、「持ってきてやりました」と書かれている。近づき態を使うことによって、ごんの心が兵十の方へ寄りそっていっていることが読みとれる。

23　そのつぎの日には、くりばかりでなく、まつたけも二、三本持っていきました。

・主語のない文であるが、文脈から「ごんは」が主語であることはわかる。

・には…既出

・マツタケ…実物、または図鑑の写真、絵などで教える。

・も…を格のとりたての形
まつたけも持っていく
まつたけを持っていく

・持っていきました…遠のき態

・二日続けて、兵十にくりを持っていってやったごんは、四日目には、すこしちがうことをした。くりばかりでなく、まつたけも二・三本持っていってやったのだ。

・うなぎのつぐないにと思い、また、いわしを事件のつぐないにと思い、一生懸命、兵十につくしているごんの心や姿が読みとれる。

・文14から23には、うなぎのつぐないをしたと思ったのに、帰って、兵十に悪いことをしたことになり、負い目を持ったごんが、思いつきでなく、つぐないということを考えて、くりを拾い、持っていってやる。ごんの姿や心が描かれている。誠実に、何回も何回も、目だたないようにしている姿がある。今までのごんの姿とはちがう。

＊22が近づき態であることと対比させると、何か新しいことがわかるかもしれない。